

## 狩谷栞齋讃歌

新井宏

いま、「狩谷栞齋讃歌」を同人誌「まんじ」に書いている。私の永年の夢であった。なんと言っても計量史の世界でもダントツの巨人、狩谷栞齋について書きたい。しかし森鷗外が評伝を志して書けなかった江戸末期の大学者である。

その栞齋の評伝を書こうと思いついたのは、もう十五年も前の平成四年である。なにしろ計量史の研究を通して栞齋に惚れ込んでいた。坂本守正さんという碩学から「新井さんが書かなくて誰が書きますか」と煽てられ、すっかりその気になって、国会図書館に通っては栞齋の交友関係図や年譜をせっせと作っていた。

しかし、まもなく現実を知る。

さほど有名とは思えなかった「私だけの栞齋」が、調べれば調べるほど巨大に聳えてくるのではないか。実証的な学者としては、伊藤仁斎、荻生徂徠、賀茂真淵、本居宣長などの思想家たちをはるかに越え、比肩できるのは新井白石くらいで、清末考証学者の愈曲園が日東第一の学者と称賛していたなどと知るとシュンとなってしまった。

その追打ちとも言うべきものが、平成六年に出された梅谷文夫の『狩谷栞齋』である。生涯を栞齋の研究に捧げた梅谷文夫の学問的な態度は、まさに栞齋そのものであった。「信憑すべき証拠が得られない場合は、判断を留保し、私見をもって真偽を論じない」と言う栞齋の信条そのままに、極めて抑制した記述で、見事に栞齋を描ききっている。

その上更に、梅谷文夫は平成十六年から十八年にかけて、『狩谷栞齋年譜・上下』を出す。九百字詰め九百ページにも及ぶ詳細極まる年譜。日記を残さなかった栞齋である。私は、世界中で、これほど詳細な個人年譜を書いた例を知らない。すさまじいエネルギーだ。もう私の出番はない。

栞齋に導かれて成し遂げた私の「古韓尺研究」であった。まだ完成したわけではないが、幾多の幸運に支えられ、基幹的な研究論文を平成十七年までに書き終えた。その上、一般向けの読み物としても、平成十九年の夏『理系の視点からみた考古学の論争点』の一章として紹介することができた。

結局、古代計量史における大問題は栞齋の考証が正しかった。後世、現代の学者達が多く資料を栞齋に仰ぎながら、「高麗尺」と言う誤りを肥大させてしまったこととの差は何であったのか。それは実証的、合理的な研究過程、すなわち史料批判が最も重要な学問(歴史学)にあつて、栞齋から大きく後退してしまったことに他ならない。この現象は現代の考古学にもあてはまるのではないか。栞齋から学ばねばならない。

もちろん栞齋は計量史などというニッチな世界の学者ではない。研究分野は和漢の古典から、制度、博物、計量、銭貨まできわめて幅広い。名書家としても有数である。しかし栞齋の凄さは、何と云っても考証、すなわち史料批判という研究態度にあつた。

学問とか研究は、得られた結果を言うのではなく、結果を得るプロセスを言う。現代の歴史学が史料批判を最重要視するのはそのためである。いわば日本における真の歴史学の

誕生は椋齋と共にあった。それは本居宣長と対極をなす業績であったと言えよう。だから私は、学者としては椋齋を無条件で買うのである。

そうだ。椋齋にもう一度チャレンジしよう。巨大な学者、椋齋の新側面を発掘するなど、大それたことを考えるのではなく、我が心象に捉えた椋齋なら書けるかも知れない。「まんじ」の同人となったのはそのためだったのではないか。

事実関係の紹介は、梅谷文夫の『狩谷椋齋』と『狩谷椋齋年譜』の丸写しで行こう。素晴らしい表現があれば、それをなまじ自己流に直して改悪する愚は犯すまい。

しかし、待てよ。それでは剽窃どころの話ではないではないか。

かくして、「梅谷文夫の研究を下敷きにして」という副題をつけることを前提に、主題を「狩谷椋齋讃歌」とすることにした。讃歌の代わりにフアンレターでも良いし、ラブレターでも良い。いずれにせよ、梅谷文夫の『狩谷椋齋』へ案内する前座として、まずは書き始めよう。

そして今、原稿用紙換算で百五十枚ほど書いたところである。しかし、肝心の計量史の部分については、初恋のラブレターのように、ポストの前まで行っては、回れ右をして戻ってきている心境である。

(前韓国国立慶尚大学招聘教授、元日本金属工業常務、金属考古学、計量史)